	前期授業アンケート結果の学科全体の集計値は、経年比較でどのように変化しているか（傾向、学科として望ましい値か等）			前期授業アンケート結果の学科全体の集計値は、全学の集計値と比較してどのような状況か。			改善・向上に向けた内部質保証推進会議からの指示
	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション	
仏教	全体のポイントが上昇傾向にある。資料・教員説明・理解度は2022年度前期・後期いずれと比較しても上昇しており、難易度も、難易の偏りが少ない3の値により近付いている。一方、目標達成は2022年度前期・後期いずれからも下降しており、数値としても2020年前期以来2番目に低くなっている。	目標達成の値が低く出たのは、学生にシラバスの再確認を促すようになった結果と思われ、過去との単純な比較はできないが、今後の改善への余地はある、	シラバスの再点検と、シラバスを踏まえた授業をより意識していくことによって、目標達成の改善が見込まれる。	資料・教員説明・フィードバック・シラバス参考・シラバス理解・授業形態・目標達成において全体平均を上回っており、開講学年・難易度も偏りのない3の値により近くなっている。一方、理解度は全体平均を下回っている。	ほとんどの結果が全体平均以上でありながら理解度が全体平均を下回っているのは、学生の専門とは異なる科目であることも一因と思われるが、今後の改善への余地はある。	オンデマンドから対面への切り替えに際して、より丁寧な説明を目指す。また、ここまでオンデマンドにおいて高評価だった項目について、対面への切り替えにおいても維持できるよう努力することが必要である。	・課題として挙げられた事項について、学生の志向等、要因を深掘り・検証し、シラバスや授業方法等の見直しに反映してください。また、授業内容に関する非常勤講師との情報共有についても、引き続き充実に努めてください。
言コミ	言語コミュニケーション科目については言語や個別の項目により数値の上昇・下降はあるが、共通しているのは「目標達成」数値の下降である。しかしそれが必ずしも「理解度」や「教師説明」と連動していないことから、授業の質の低下というより、学生側の期待値の上昇ではないかと考えらえる。	専任教員の自己研鑽の必要は言うまでもないが、非常勤の質向上も必要である。知識面で問題のある教員はいないが、学生への対応、話し方、板書やプロジェクタ画面の工夫等、「教員説明」「理解度」をより高める努力はこれでよいということはない。非常勤自身の資質や専任の働きかけも重要だが、環境整備もまた重要である。	言語コミュニケーション科目についてはまず「目標」を明確化する必要がある。それは本来シラバスに明示されているものであるが、言語コミュニケーション科目を選択する際、シラバスを確認する学生の比率が低いことは今回の調査からもみてとれる。初回でシラバスを紹介する試みも行ってはいるが、その数字に大きな変化はない。言語学習にあっては学生ごとにレベルや目標が異なることが多く、可能な限りそれを見極めるとともに、当該クラスレベルに応じた目標を具体的に設定するなどの工夫が求められる。	全学的な比較でいえば、言語コミュニケーション科目に特に改善が必要な点は見当たらない。「教師が学生の理解を確かめながら授業を進めたか」の項目ではむしろ優秀な評価を得ていると言える。「難易度」についても、大学全体の平均をわずかに上回る程度、つまり適度、さらに言えばもう少し難しくてもよいと解される。	「点検結果」を踏まえた課題は特にないが、よりよい授業を目指すという意味では「経年比較」同様、非常勤も含めたFD及び環境整備が課題として挙げられる。学生への対応、話し方、板書やプロジェクタ画面の工夫等は、これでよいということはない。専任による働きかけも重要だが、環境整備もまた重要である。	毎年度の検証を継続し、改善・向上に努める。	・課題として挙げられた事項について、学生の志向等、要因を深掘り・検証し、シラバスや授業方法等の見直しに反映してください。また非常勤講師の在り方を含めた科目区分全体の枠組み及びICTの活用について、検討してください。
情報	2020年度は遠隔双方向型およびオンデマンド型での授業であり、教員学生双方がオンライン開講に慣れていなかったためか前期後期を通じて理解度とフィードバックの値が若干低い。21年度以降は対面式と遠隔双方向型およびオンデマンド形式を組み合わせることによりそれらの値も高くなり、安定的に授業が運営され学生の理解度も高く保たれていることを示していると考えられる。	アンケート結果は比較的良好な状況であるので、これを維持することが課題である。	現状を維持するためには授業期間中に個々の学生の状況を把握し適切に対応するなどきめ細かいサポートが必要となる。さらに、新しい学習指導要領により高等学校情報科を履修した生徒が本学に入学する2025年度以降に向けて「情報リテラシー」の内容を検討する必要があると思われる。	全体平均と同様の値であるが、資料、教員説明および理解度は全体平均より高い値であり、その他の項目は若干低めとなっている。回答の9割を占めている必修科目の「情報リテラシー」については学生がシラバスを参考にする余地がないため、シラバスに関連する値が低いと考えられる。また、前述の3項目の値が高いのは難易度が若干低めであることと関連していると考えられる。	全体平均と同様の値が得られているが、情報リテラシー科目としてその結果が妥当であるか判断するのが難しいことが課題である。	他大学での全学必修情報リテラシー科目の状況などについて情報収集や情報交換を行い、本学における改善につなげたいと考えている。	・数理・データサイエンス・ＡＩ教育プログラム認定制度のモデルカリキュラム改訂に対応した、新たな情報基盤科目の内容について、令和7年度からの施行に向けて、令和6年度に検討・策定を行ってください。
健康	各設問において、緩やかではあるが点数は向上を示す傾向にあり、カリキュラムの適切な実施が伺える。しかし一方で「目標達成」においては2022年度と比して僅かに低値を示した。	「シラバス参考・理解」を促すことで「目標達成」の向上を図ることが課題となる（散布図のバラツキが少なく、高い相関を示していることから）。	最適なカリキュラムとなるよう継続して検証に努める。	全体集計値との比較において「教員説明」「理解度」「目標達成」は高値を示し、「資料」「シラバス参考・理解」「目標達成」はほぼ同値を示した。しかし一方で「フィードバック」においては低値を示した。	各担当教員において、フィードバックの方法について改善を加える。	最適なカリキュラムとなるよう継続して検証に努める。	・課題として挙げられた事項について、学生の志向等、要因を深掘り・検証し、シラバスや授業方法等の見直しに反映してください。また、非常勤講師との情報共有や、女子大学としてジェンダーの観点を取り入れたカリキュラムの検討に取り組んでください。
ジェンダー（キャリア）	ジェンダー科目のうち、R5年度前期に開講されたのは、1回生配当の「ジェンダー研究入門」のみである。今回の前期授業アンケート結果では従来の「キャリア教育科目」の中に当該科目が入っており、旧カリ「キャリア開発Ｉ」等と、異なるカテゴリーの科目がまとめて集計されている。当該データを基に検討するのは適切ではないと思われるが、新カリキュラムがシステム上まだ反映されていないということかと理解している。 「ジェンダー研究入門」は今年度初開講であるため経年比較はできないが、「キャリア教育科目」全体でみたとき、どの項目も2022年度まで違い「非常にそう思う」の割合が減り、「そう思わない」が増えている。これが、新設の「ジェンダー研究入門」が加わったための問題なのか、今年度の「キャリア開発Ｉ」の問題なのかは、継続的な検証が必要。	次年度は新カリによる共通領域ジェンダー科目が次々開講されるため、授業アンケートにおいても独立したカテゴリーとして、分類いただきたい。		全学の集計値と比較すると、ほとんどの項目について「キャリア教育科目」の数値が、全学平均より下回っている。差は大きなものではないが、どちらの科目に関連するのか、あるいは両科目ともに関連するものなのかは、継続した検証が必要。また「ジェンダー研究入門」のアンケート集計結果（グラフのみ）を参照するとと、各項目のうち「そう思う」という回答の割合が大変高いが、他方で「非常にそう思う」の割合が低い。	「ジェンダー研究入門」は今年が初開講であるため、受講生の反応などが分からない段階で準備されたが、来年度は、今年度の受講生の感想や課題提出状況、授業アンケート結果などをもとに、授業内容等を見直す必要がある。	旧カリのキャリア教育科目「キャリア開発Ｉ」が来年度より共通領域ジェンダー科目の「キャリア形成Ｉ」に位置づけが変わるため、「キャリア形成Ｉ」のコーディネーターと、「ジェンダー研究入門」の担当者に、「キャリア教育科目」のデータを共有し、各科目の改善について検討を依頼する。	・科目個別のアンケート結果も検証し、ジェンダー科目の構築に繋げてください。

	前期授業アンケート結果の学科全体の集計値は、経年比較でどのように変化しているか（傾向、学科として望ましい値か等）			前期授業アンケート結果の学科全体の集計値は、全学の集計値と比較してどのような状況か。			改善・向上に向けた内部質保証推進会議からの指示
	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション	
連携	4年間の経年比較においては、「フィードバック」「理解度」が上昇傾向にあり、担当教員が丁寧な指導をしていることが推察され望ましい値である。「難易度」が後期に数値が上昇するのは野村證券の講義が原因である。連携推進課で授業運営の関係上、教材や受講生のレポートを見る機会があるが、ファイナンス・金融を幅広くテーマに取り上げた内容のため、理解度に所属学部によりばらつきがある。受講後の感想レポートでは「難しいが就職に役に立つ」等の意見が多く、難易度については問題ないと思われる。	オンデマンド型が多く、「受講生の理解度を確かめながら進められてた」の回答にばらつきがある。	オンデマンド型の授業については、受講生へのフィードバックを行っている。今後も、ポータルで積極的に質問を受け付け、共通の質問が多い場合には、オプションでスライドを作成するなど対策を講じる等検討したい。	全学科と比較して、連携活動科目は肯定的評価（非常にそう思う＋そう思う）が高く、総じて受講生の満足度が高い授業が提供できているようである、ただし、「課題に対する効果的なフィードバック」「受講生の理解度を確かめながらの進め方」にばらつきがある。	上記の課題と重複するが、オンデマンド型の講義についてフィードバック方法と理解度の確認に課題がある。	上記と重なるが、オンデマンド型の授業については、受講生へのフィードバックを行っている。今後も、ポータルで積極的に質問を受け付け、共通の質問が多い場合には、オプションでスライドを作成するなど対策を講じる等検討したい。	・課題として挙げられた事項について、外部講師への情報共有方法等の見直しに反映してください。
教養	今年度のアンケート結果は、おおむね良好である。特にフィードバックについては2020年度後期の3.67から、2023年度前期4.05まで改善しており、フィードバックの重要性が浸透してきたものと思われる。他の項目についての結果も改善傾向であり、全学対象の講義科目という性質を踏まえると、おおむね問題ないと判断できる。	現行の枠組みにおいては、おおむね良好な結果が出ているが、枠組みそのものの妥当性の検証ができていない。	令和9年度からの全学共通領域全体の大幅な見直しに備え、大学全体の方向性を踏まえた基本的な方針を定める。	全体的に大きな差はなく、おおむね良好な結果となっている。注目に値するのは、シラバスについての2項目（参照・理解）がともに全科目平均より若干高い点である。学生たちは必要に応じシラバスを活用しており、今後の教育改善におけるシラバスの重要性を示している。	能力の修得状況が「知識・理解」に偏っている。現行のあり方ではやむを得ないが、今後、このタイプの授業をどれほど続けていくか、検討が必要である。	「教養科目」でありながら「知識・理解」偏重に終わらない授業方法ができないか、FD活動を通じ授業方法の検討を行う。	・令和9年度からの再構築に向けて、枠組み・運営方法も含めた見直しを、令和6・7年度に進めてください。
日本語	経年で比較すると、まず「資料」「教員説明」「フィードバック」「理解度」は前年より数値が上がっている。特に「理解度」はこれまでで一番良い数値であり、望ましい傾向である。これらは主に授業担当者の力量と熱意、努力等に関わる項目であるが、日本語教師課程運営委員会を中心に課程全体で教員間の連絡と情報共有、問題の把握や改善への努力を進めてきた結果あると考える。 次に「難易度」は前年度と比較して下がっており、またこれまでで最も低い数値である。これは教育実習の一つ前の位置で入門レベルではない「言語と教育」で1回生履修を避けるように呼びかけ、前期は1回生が1名もいなかったことが関わっていると考える。一方、「目標達成」が前年度に続いて下降しており、望ましくない傾向と言える。 なお、前期アンケートの中で「2022年過年：回答数2名」というのがあるが、これは日本語教育実習履修生の回答である。教育実習では実習先の具体的な日程や体制などが明確になる前にシラバス入稿をしなければならないため、シラバス記載内容と実施内容が異なってしまう場合もある。また校外実習もあり授業形態等も他の科目と特徴が異なる。そのため教育実習科目の評価を全学統一アンケートで測るのは適切ではないと考える。日本語教育実習では文化庁の指針を参考とした科目独自の終了時アンケートを実施している。	「目標達成」が前年度に続いて下降していることから、その背景や原因を探る必要がある。 なお、「目標達成」は、授業担当者はもちろんのこと、課程の全体運営に関わるものであるが、「シラバスに記載されている目標」であることから、特に「シラバス」に関わると言える。 記入者が授業を担当している限り、履修生はシラバスをあまり読まない傾向にある。次回からアンケート回答の際には、学内HPのサイトに誘導して該当科目のシラバスを読み直してもらってから回答してもらおうと考える。	「目標達成」が前年度に続いて下降している傾向への対応として、令和6年度シラバス入稿に当たり、各授業担当者に再度目標設定の見直しをお願いする。 なお「目標達成」の学年平均をみると、学年が高いほど達成度が上がり、1回生が低い傾向にあることが分かる。1回生履修者が多く、日本語教師課程科目が全体として難易度が比較的高いことが「目標達成」の低い数値に関わっている可能性もある。 「開講学年」について、教育効果の向上を目指し、令和6年度からカリキュラム修正を行い、「言語と教育」を2回生以上で履修することとした。その影響を注視する。 「授業形態」についても、教育効果の向上を目指し、令和6年度から一部変更するため（「言語と社会」：オンデマンド→対面、「言語と教育」：ハイブリッド→対面）、その影響も注視する。	日本語教師課程科目は、全項目について全学集計値と比較してよい数値である。特に、授業に直接関わる「資料」「教員説明」「フィードバック」「理解度」の4項目の数値がよい状況にある。上でも述べたように、熱意をもった適任者が授業を担当していることに加えて、日本語教師課程運営委員会を中心に課程全体で教員間の連絡と情報共有、問題の把握や改善への努力を進めてきた結果あると考える。 「難易度」について、以前は全学集計値と比較して高めの傾向があったが、今回は縮まっている。これも、上述のように前期は1回生が1名もいなかったことが関わっていると考える。 一方、「目標達成」は全学集計値とほぼ同じ数値である。	上の当該科目区分の経年比較と重なるが、「目標達成」について、その背景や原因を探る必要があると考える。 「目標達成」と「シラバス」との関係も上述に準じる。	全学の集計値と比較においても、課題は「目標達成」であるため、上述に準じる。 「目標達成」に関してシラバス入稿時に各授業担当者に働きかける際、「シラバス参考」「シラバス理解」についても留意してもらうようにお願いする。 なお、全体として、新法律（日本語教育機関認定法）が本年4月から施行されることに伴い、本学日本語教師課程もカリキュラムと教育内容を今後変更する可能性がある。改善へのアクションは、一方で国の新しい指針に即応しなければならないものであることを付記しておく。 また、これは今回のモニタリングの検討項目等ではないが、履修生数（可能であれば合格者数、単位取得者数）に対する回答率を示す必要があるのではないか。	・課題として挙げられた事項について、学生の志向等、要因を深掘り・検証し、シラバスや授業方法等の見直しに反映してください。
司書	どの項目の数値も年々上昇傾向にある。特に「教員説明」の値が4.15と最も高く、担当教員らにとっても励みとなる。シラバスに関する新項目の数値からは、学生たちがシラバスを受講の仕方に役立てていることが分かった。ただし、シラバス記載の到達目標に達したかどうかについては、前期より後期の数値の方が高い傾向にある。	シラバスに記載された到達目標の達成具合を確認する方法が分かりにくい（見えにくい）のではないか。	シラバスに記載する到達目標を分かりやすくする。各科目の担当教員にシラバスを見直してもらい、当該科目受講後の到達内容（何をどこまで、どの程度など）を明確にする。（2024年1月に司書課程懇談会を開催し、伝達済み）	司書課程の全体集計値は全学の集計値と比較して大差なかった。各能力の修得状況は、「自立性」を除き、全体平均よりどれも高い数値であった。	資格科目の中で身につけられる「自立性」とは何か、司書課程全体で考えていきたい。	1月の司書課程懇談会では、教員間で意見交換や問題意識を共有することができた。次年度も非常勤の先生方と課題を共有し、指導の仕方や受講生へのフィードバックの工夫などについて話し合う場を設ける。	・課題として挙げられた事項について、学生の志向等、要因を深掘り・検証し、シラバスや授業方法等の見直しに反映してください。
学芸員	2023年度前期分しか平均値データがないものについては経年比較ができないが、その他については「難易度」をのぞき、昨年度に比べ全体的に数値が上昇している。とくに「フィードバック」の値は4.20と昨年度（3.90/3.69）から改善されている。ただし、どの年度も前期科目の数値が後期科目よりも高い傾向にあるので、例年並とも考えられる。博物館学芸員資格関係科目は、実習Ⅰ(学内)・実習Ⅱ(学外)以外は、すべてオンデマンド型授業であるため、教員と学生の対話が難しい科目であるが、その点について「フィードバック」の値が相対的に良好であることは、担当教員の取り組みが高く評価されていると判断できる。 「難易度」については、数値が必ずしも高いが良いわけではないので、3.09という数値は、従来より「適切」であると評価されたと判断できる。	コロナ渦により、博物館関係授業はオンデマンド型授業から対面型への移行ができていない。 学芸員という仕事は物を扱うだけでなく、人との対話が重要であるため、他の資格関係科目との調整が必要である。	来年度の授業において、この資格課程の導入授業である「博物館概論」を対面実施で出来るよう教務課で調整していただいたが、国文・史学・造形・現社・児童の5学科の学生が受講するため、対面での時間割調整ができなかった。そのため、対面実施のクラスと、オンデマンド受講のクラスを併設するなどの工夫を考えたい。	全体集計値は全学の集計値と比較して大差ないが、「目標達成」は、高い数値である。とくに、「知識・理解」や「思考・判断」の選択率の数値がたかく、資格関係科目ではあるが、各自の思い描いていた能力が身についたと評価された。ただし、やはりオンデマンド配信授業であるため、「対話・相互理解」や「自立性」が極端に低い選択率となっている。	「目標達成」での「対話・相互理解」や「自立性」が極端に低い選択率であることは、学芸員の資質形成の上で大きな問題点である。	上記欄の経年比較と同様であるが、まずは対面での授業実施の実現に向けて、課程運営委員会においても検討していく。	・課題として挙げられた事項について、学生の志向等、要因を深掘り・検証し、授業方法等の見直しに反映してください。